

「やまがた観光まちづくり塾」in最上 概要 10/24(火)

【講話】

講師：栗田和則 暮らし工房主宰

場所：金山町「蔵史館」

参加者：40名

- ・気持ちよく暮らしたい町にするために、杉を植える活動をしている。
- ・地域づくりとは、住んでいるそこ（地域）で何ができるかどうか。
- ・行政が考える地域づくりには時限がある。住民が考える地域づくりとは、どんな思いをもって積み重ねるか、どんな町にしたいかというものであり、自ずと違いがある。
- ・地域づくりをしていくためには、「しなやかに」、「したたかに」、「しぼまずに」続けることが大切である。
- ・そこにあるものを活かす。それには物語性があり、1のものを作り上げる。
- ・仲間町の入りに“杉の町金山”という看板を造った。町民にも見てもらうことで誇りの共有になっている。
- ・PRを先に考えるかどうかは、どういう思想を持っているかが大事である。
- ・「好きこそもの上手なれ」と言われる。自分は何をしたいか考えること。
- ・様々やっていく中で、変わらないものと変わっていくものの両方存在することが必要である。
- ・そこに住み続ける人が、自信と誇りと希望を持ち、引き継いでくれる若い世代をどうやってクローズアップさせるかが大事であり、そうしないと次が続かない。

【講話】

講師：庄司博司 氏 NPO法人四季の学校 理事長

場所：金山町「谷口がっこそば」

参加者：40名

- ・少子化等の影響で、平成8年3月閉校となった学校を何とか活用していく方法はないかと地区内外の有志13名による「谷口分校運営委員会」を設立し、話し合いを行っていった。
- ・平成9年6月 四季の学校（年4回開催 毎回40人程度の参加があり、北ターも多い。地元の父ちゃんたちが「せんせい」となり、校舎の修繕や、グラウンドの草刈などを一緒にやったり、田植えや山菜採りなどの体験を行う。参加者同士で結婚にしたカップルも多数）、同7月がっこそば（そば屋。農家の手の開いている人が出てくる。土日営業、予約があれば平日も開店）が開店した。
- ・そばでは、初めて100人のお客が来たときに祝杯をあげたが、お陰で、100人は珍しくなってきた。また、200人来たときに祝杯をあげたが、これも珍しいものでなくなってきた。今度は300人来たときに祝杯をあげようと計画している。何度も訪れてくれる人が紹介してくれることで、その輪がどんどん大きくなってきている。
- ・山形県ベストアグリ賞、豊かな村づくり農林水産大臣賞、立ち上がる農山漁村全国30選受賞。

【肘折温泉の状況について】

説明者：肘折温泉「つたや 肘折ホテル」柿崎雄一

場所：肘折温泉「いでゆ館」

参加者：42名

- ・10月は、年間で最も客のいる時期。
- ・平成2年観光客は、年間20万人だったが、平成17年には年間12万人と減少している。
- ・湯治の客が減ってきている。
- ・町内会、観光協会、青年部、スキークラブ等のメンバーが一丸となって町づくり、地域イベントの開催に関わっている。

【レクチャー】

講師：甲斐賢一 ホテル風月HAMMOND 代表取締役 大分県NPO鉄輪湯けむり倶楽部 代表

場所：肘折温泉「いでゆ館」

参加者：42名

甲斐氏によるレクチャーに先立ち、副知事より甲斐氏の紹介が行われた。

後藤副知事

甲斐氏は自分の信念を貫き、めげない、どこにでも行くパワーのある方。別府は凋落傾向激しい温泉地といわれていっていますが、その中であって、様々な取組みをしている。別府八湯まちあるき、温泉文化の再発見、医療との連携、外国人留学生も巻き込んだまちづくり、NPO活動、バリアフリー、ファンゴを活用した新ビジネス、知的財産の取組みなど、汲めども尽きぬアイデアと行動。甲斐氏の知恵の源泉をみなさんに学んでいただきたい。

甲斐氏

まず、後藤副知事と川口塾長という絶妙のタッグが組まれている。このチャンスをつかんで、「やまがた観光まちづくり塾」、がんばっていただきたい。

私の旅館では、2002年にストマ用トイレを始めた。また、盲導犬のワンちゃん同伴の忘年会を20年来やっている。

大学卒業後、高校教諭を経ていまのホテル経営者となったが、教諭時代の先輩教諭が病により目が不自由になり、仕事もやめざるを得なくなった。その先輩から盲人の忘年会を企画してほしい、という言葉を引きかけに、障害者の宿泊を企画するようになった。

すべての人に優しい宿つくりのため、高齢者や障害者を対象にしたモニターツアーを実施した。客室や浴場、トイレなど施設の構造や使いやすさ、従業員の対応などアンケートをとった。受入のノウハウを共有し、おもてなしのレベルを高めるためである。

その間、人口肛門を装着している人との出会いがあり、人工肛門装着者（オストメイト）向けト

イレを設置した。これは、先進的な取り組みであった。このように、様々な人との出会いを大切に、施設等へ反映させている。

障害者用施設のコンサルタント等はあるが、実際に障害者と話をして得た情報の方が確かで役に立つものである。定期的に障害者を対象にした宿泊モニターを募り、経営者やマネージャーが直接会って、利用しての感想などを聴くようにしてる。

「人づくりまちづくり」

大分では、地区を12の地域に細分化し、6地域ずつ2年の塾を開催（仮にAとする）。最初の塾が終わると別の6地域が塾を行い（仮にB）。さらに（Aの2期生）、続いて（Bの2期生）・・・といった具合にまちづくり塾を開催し、レベルアップをはかっている。

まちづくりを進める（別府の場合）うえで大変なのは、特にまちづくりをしなくても食べていける（不自由なく生活できる）人・旅館をまとめることだった。まちづくりの必要性を分かってもらうことが重要。わかってもらうには、相当の信念をもってお願い・説明しないと伝わらない。

また、新しいことをはじめるときは、出る杭は打たれる。必ず邪魔する人が出てくるということも頭に入れておくこと。前に進んでいくことは全く怖くないのだが、後ろに敵がいる。打たれるときは突然なので、精神的にも辛いものだが、打たれてもくじけないことがまちづくりに必要である。

「ML（メーリングリスト）を活用した取り組み」

大分はインターネットの環境が早くから整っていた（1996頃～）ので、別府まちづくりのメーリングリスト（実名主義で）を作ろうということになり、ネットワークが広がった。

実名を使っているのでいいかげんな発言もなく、MLを使用すればわざわざ会わなくても会話ができ、記録にも残るので、会議や打ち合わせでありがちな「話を聞いていない」ということもなくなり、“鈍い”という感覚・風潮をなくしていった。

「出る杭は打たれる」というが、打たれない為にはたくさんの湯煙を上げるアクションを起こし、皆でやることだ。そして地域のリーダーは、常にリーダーではなく、時には梃子になる。これが井戸掘りの美学だ。街歩きでは、竹瓦路地裏散歩など7つの散歩道を提唱し、「街歩きの別府」というイメージを作った。

「鉄輪湯けむり倶楽部」について

鉄輪温泉には80軒の旅館がある。別府温泉全体では220軒あり、別府八湯とか別府温泉郷と称している。

鉄輪温泉のNPO法人「鉄輪ゆけむり倶楽部」が2001年にNPO法人に認証された。湯鉄輪けむり倶楽部は、観光客に鉄輪温泉の歴史や文化等の魅力をガイドする「鉄輪湯けむり散歩」を中心に活動し、収入は、ガイド料の一人700円や物地獄蒸し「豚饅」の販売店からの寄附でまかなっており、年間120万円で活動している。ガイドはメンバーで手の開いている人が対応している。また、各千

円の終身会費で会員となり、毎年会費を徴収しない。また、ガイドだけでなく、街歩きガイド養成なども行っている。最近では、別府温泉の魅力に引き込まれた外国人ボランティアによる英語でのガイドも注目を集めている。

その他の取り組みとしては 飲泉 温泉泥のエステ 地獄蒸し料理など様々な事業化を行っている。

別府ONSEN文化国際交流事業は運輸省課長とのつながりで外客受入れ事業として取り組んだ。別府市はバースと姉妹市であることから、ヨーロッパでは信頼されている。

別府八湯温泉泥（ファンゴティカ）による美容エステは、美容エステで使用している温泉泥に皮膚を引き締め、気分を癒す効果があることを科学的に立証し、医師によりお墨付きを得て、「別府八湯ファンゴティカ」という名前で商標登録を行った。

なぜ商標登録を行ったかということ、独自のもの・いいものというものはいつの間にか悪い人に使われてしまう。知財は悪い人に使われない為に使う。そのためにも、商標登録することをお勧めする。商標は町づくりの財産になる。

同じように「別府八湯温泉泊覧会（オンパク）」、温泉を使った多様な体験型プログラムの提供をする「オンパク」を標章登録した。標章登録は、儲けるためではなく、他人から悪用されないためである。

【ディスカッション・交流会】

場所：肘折温泉「いでゆ館」

参加者：43名

阿部氏（庄内地区）

湯布院や黒川温泉だけではない解決策があるのかなと思っている。湯野浜にあったやり方を考えていかなくてはと思った。

遠藤氏（置賜地区）

金山町は3回目。すばらしい町で、重みを感じました。栗田先生から木を植えることが金山の繁栄につながっていること。甲斐先生の話では、いいところは真似することが出来ればと思った。

そこにあるものを活かしていくことが大切であると思った。

村山氏（庄内地区）

肘折温泉は初めて。数日前に「三餘の会」で出羽三山周辺の信仰について勉強してきた。月山を廻っただけでも信仰の色々な考え方があるのかなと思った。肘折温泉はスピリッツを感じるが、さすがに遠い所かと思った。桃源郷のような所で、庄内からも大勢の人が来るといいと思った。

金山町は時間をかけて綺麗な町である。センスもいい。そのセンスはどこから来るのか。いいものはセンスのいいところで磨いて取り入れていくのがいいのではと思った。

川口塾長

金山町は住んでいる人のための景観。鶴岡、酒田はどうなのか。

西村氏（庄内地区）

それぞれの人の生きざまに感動した。そこに住む人が生き生きと暮らしを楽しんでいる。そのさまを見てもらうためにしているのでないところに感動した。

川口塾長

最上の端、赤倉の押切さんはどう思ったか。

押切（最上地区）

生まれは大阪。何の縁か最上町に住んでいます。ゆっくりと暮らしたいということで来たのに、次から次へと用事を頼まれ「個食はイケナイ」なんて云う会議に出席して家族との食事もおちおち出来ない。

地域行事ではできるだけ妻子共に参加することで家族のコミュニケーションを保っている。また、このことで、取り組みの内容が困難であるほど家族の理解と協力が得られる。

しかし、まちづくりがしんどいでは参加者の同意が得られ難い、楽しいボランティアがいいし、子供も参加する方がいい。雪かきも子供たちと共にしているが楽しむ工夫をしている。一見しんどいことを皆で楽しむ工夫がまちづくりに繋がると思う。

志田（村山地区）

甲斐先生の話からヒントを得られたような気がする。地元に戻ってから青年部と親たちにも報告して議論していきたいと思った。

志津温泉に来たことがない人が多かった。ぜひ豪雪の冬に来てほしい。6 m位しか積もっていませんから。志津温泉の青年部で今年から冬のイベントとして「雪の家まちなみプロジェクト」として雪だけ家を作った。今回は1軒だけだが、2年目の今年は6軒位つくりたい。蝋燭をともし、夜しか見えない家をつくってみたい。

馬場氏（置賜）

新庄から金山に入ったとき、こんなにも「まちなみ」が変わるのかと思った。2時間30分かけて来たが、同じ山形にいながら、こんなところもあるのかと思った。旦那衆の町だな、正当派のまちづくりをやっているところだと感じた。

肘折温泉は見て楽しかった。銀山が秘湯として有名であるが、私が県の観光の担当であったら次は肘折ではないかと思ったし、ぜひ肘折に取り組みさせていただきたいとも思った。

本間氏（庄内地区）

金山町に行って感動したのが、ガイドの方。案内の道すがら、ゴミを拾いながら案内をしてくれた。日頃からやっていることだから出来るのかなと思った。

谷口がっこそばでは、廃校に追い込まれた分校の昇降口に、もう一度、子供達の長靴がならぶことという話に涙が出る。

また、肘折温泉。私は鶴岡市の温海支所で観光の担当をしており、色々な取組みをやっているが、後ろから銃で撃たれるがごとく、なかなか地元を受け入れられない。甲斐先生より人づくりが一番と話を受けましたが、人づくりのこつとは何か、改めてお伺いしたい。

甲斐氏

どうしても撃たれます。町にとっていいことをしているのになぜ撃たれるのか。撃たれない距離まで走らなければならない。新しいことをやっていくとき、誰にもしゃべらずに行く場合が多い。しかし、一人ですることは難しい。周りでフォローしてくれる人が居ることが重要で、そうすることで純粋にやっていくことができる。また、撃つ人は年をとっていく。同じように自分が次ぎの世代を撃たないことも大切である。ただし、ルールだけは教えること、おいしい物だけを食べて、まずい物は口から吐き出すようなことだけは無いように。

秋山（YKK）

金山町は人のデコレーションが加わっていない。ポイントは木と石と蔵のイメージで、3つを組み合わせた純朴なイメージが感じられる。

栗田さんの話では、人としての生きざまを学んだ。

肘折温泉は初めてである。毎月何らかの行事をしている。でも宿泊者が少なくなっている。なぜか。変にデコレーションしすぎているのではないか。お客の年齢層の分析はしているのか。小手先のものに頼っていないのか。ただやっているだけなのか。人が来ないのなら、しなくてもいいのではないか、とか色々、思ったりした。

甲斐先生はチャレンジャーだと思った。点から線、線から面へのつながりがうまい。撃たれて撃つて、話もいろんな所に飛んでおり、まだ理解できないこともあった。

川口塾長

前に出るから撃たれる。必ず前が空く。それを超えればいい。肘折は努力しているのに、お客は減ってきている。肘折温泉、反論したいのでは。

柿崎氏（最上地区）

デコレーションしすぎて、パワーをかけすぎかもしれないが、辞める訳にはいかない。肘折温泉は標高300m程度だが、雪は4m積もる。山の中に住むとはどういうことか。市町村合併、学校の統廃合、色々あるが、俺はここが好きで生きている。

息子とは、なめこ取りにしているが、高校生からは下宿することになる。ここに戻ってくるのは30歳前後。

イベントも、大事にしてきたものがある。今辞めると無くなるという危機感がある。あと何百年後もここに人が住んでいるようにしたい。子供達にも伝えていきたいと思う。

ここでは、30代前半が一番下で、やっていて楽でないものがある。くたびれているが辞められない。肘折温泉は情報発信が下手だと言われたが、それでもやって行こうと思う。

甲斐氏

柿崎さんの話を聞いて。肘折温泉は活気があって、いいところである。お客さんの数とか宿泊客の数とか気にしすぎである。来る、来ないだけに固執してはいけない。

かつての別府は良くない話ばかりであった。全て悪いところからスタートした。「別府のここが悪い」とか言われ、来たときあるのかと聞けば、「人の話によれば」ということ。人の話はあてにならないものである。また、メディアに出た情報というのは、出た時点で相当遅い情報でもある。

肘折温泉は今のパワーを続けてほしい。客が減っても食べていけるだけでいい。私のところもハードが悪いと言われた、大晦日の紅白を見るためにアンテナを直していたこともあった。

メーリングリストをこの会で作ってほしいと思います。でも単に見るだけではだめで、情報発信が必要です。私も仲間にいれてほしい。講師の方も入れることをお願いします。

川口塾長

スリーダイヤのマークの仕事をしたことがある。皆が選ばないものを選んだ。少ないものを選ぶこと。それは経営者の勇気であり、有るか無いか、勇気を持ってあたること、勇気ある経営者のいる企業は伸びる。

後藤副知事

最上の皆さんの話をうかがい、その中で、「そこと私」、「そこに暮らす意味」という言葉が共通して出ていたようです。谷口がっこそばでは、「分校が無くなることで、自分たちの自信も無くなるような気がしたので、何とかしようとした。」という話もあった。そこに暮らして、どの様に生きたいのか。「くらしの豊かさとは何か。」に向き合うことではないか。

別府温泉と湯布院という対峙してとらえている人が多かったが、この2地域は対抗している訳ではなく、仲良く連携している。そして、それぞれ、遣子個性をもった地域が、そこにあるものを活かしながら、それぞれの道を歩んでいる。

湯布院の中谷健太郎さんも「そこが、ここになる日」ということを言っていた。。皆さんも同じ様なことをしていると思う。

先程、甲斐さんからあったメーリングリストに関連して、庄内の塾生の有志がホームページを立ち上げてくれた。あれが、メーリングリストになるのかなと思っている。ただ、情報を取るだけではだめで、今日あったことなどを書けばいいと思うし、情報発信、問題提起、各種取り組みへの参加の呼びかけなど、これを繋いでいければと思います。

甲斐さんが出演したNHK総合TV、「日本再発見」という1時間番組がありました。甲斐さんよりDVDをいただいたので、連絡していただければ、お貸します。

川口塾長

最上川の舟下り、今日は載ることが出来ず、とても残念でした。最後に最上地区の顧問、最上峡芭蕉ライン観光の鈴木社長より締めをお願いします。

鈴木社長

今日は、船に乗らなくてよかったと思います。

通常企業の寿命は30年と言われているが、私どもの会社は43年間やってきた。私は4代目ですが、創始者と思って取り組んでいます。

人は、一人では幸せになれない。共に生活しないとだめである。栗田先生の話聞いて、話の端端にすごいものが含まれており、感激した。また、甲斐さんの話を聞いて、地域づくりとは、結集して苦しみ、そして喜び、それを語る。そして、それらが、山形県全域のまちづくりに繋がるものと思った。

ディスカッションでは、相手を感じたものは皆、バラバラ。次回から全員に30秒でも、発表の時間があればいいのかと思った。